体感。感動。感謝。NBUのCOC事業をお伝えします。

coc-nbu.jp

November 2016 Nippon Bunri University, COC MAGAZINE

文部科学省 地(知)の拠点

日本文理大学COC事業

おおいた、つくりびと

生きがいのある、未来の社会を創る「モノ」。

超高齢化社会における暮らしの「質」の向上を目指して、
プロジェクト型ワークショップ「Hallow」開催。

No. 11

Copyright Nippon Bunri University, All rights reserved.

▲大学生、医療・福祉関係者、企業の皆さんが結集し、6つのグループが誕生。

産官学民医が連携し英知を結集、多様な視点で「超高齢化社会」を考える。

「生きがいのあるくらしを創るオープンイノベーションワークショップ」成果発表。

「Hallowワークショップ」とは、大分県内の大学（工学系×看護系×芸術系）と病院、民間企業などが一体となり、超高齢化社会に役立つ「モノ」について共に考え、創っていくプロジェクト型ワークショップ。今年5月からOPAM（大分県立美術館）にて5回にわたり、それぞれのテーマや課題解決に向けた「モノづくり」にチャレンジ。試行錯誤を重ね、ついに成果発表の日を迎えました。

▲最終発表会後に参加者で記念撮影。「Hallowワークショップ」は今秋から第二弾プロジェクトがスタート。

未来の社会をイメージし、役立つ「モノ」を創造する。

Hallowワークショップに参加したNBUの学生たち。これまでの学内プロジェクトとは違い、他大学の学生、医療・福祉関係者、地元大分の企業の皆さんとひとつのチームを組み、超高齢化社会を迎える、これからの時代に必要とされる福祉器具などの「モノづくり」に取り組んでいく。チームごとにポストイットを使い課題を整理したり、レゴブロックを用いて自分の考えをカタチにしてみるなど、まさに参加者自身が未来の社会を考え、その社会の中で役立つ「モノ」をつくるプロセスが、ゼロから動き始める…。

▲レゴブロックを使用し、未来の社会に必要なモノ、大切な考え方をカタチにしてみる。

▲複数のコンセプトやアイデアを整理し、ひとつの「モノ」へと結実させるためにメンバー全員でディスカッションを重ねる。

▲Happiness Long Life Open-innovation Workshopの頭文字をとり、「Hallow」と名付けられた。

ユーザーに寄り添うことで、本当に必要なモノが見えてくる。

実際のユーザーの感覚に共感するために行ったのが、疑似体験を通して、医療・福祉機器に関するモノを短時間で作りあげる「ヘルスケアハッカソン」。年齢を重ねると目が見えにくくなったり、身体が思うように動かなくなる…と頭では理解していた学生たち。だが、専用の器具を装着し、片麻痺、老人性の視力の低下などを体感した瞬間、想像以上の不便さ、動きづらさに

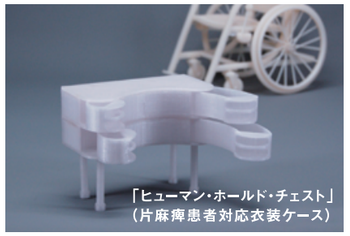
▲視界が限られ、思うように足が動かない状態に苦労する学生。すぐに起き上がることができない。

言葉を失う。日常生活をこの状態で過ごすユーザーの感覚に共感することで、解決策につながる様々なアイデアが生まれてくる。そのアイデアを追究し、解決策に近づくために行われた「アイデアソン」を通して、より具体的なアイデアとして実を結んでいく。メンバーが共感することから生まれたアイデアを共有しながら整理し、プロトタイピングを行うことで、「思い違い」や「足りないところ」に気づくことができる。「本当に使える」、「生きがいを創造する」ことを重要視したディスカッションと試作品づくりが、限られた時間の中で進められていった。

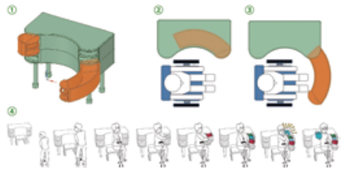
▲「ヘルスケアハッカソン」では、片麻痺も実際に体感した。

機能性だけではなく、「想い」に応えるアイデアを。

ついに迎えた成果発表会には、NBU日本文理大学、大分県立看護科学大学、大分県立芸術文化短期大学の学長をはじめ、一般社団法人 大分県工業連合会会長、大分東部病院の関係者などが参加。本ワークショップのガイドを務めたNBUの市田秀樹特任准教授が「専門家に解けない課題の75%は一般市民が解くことができる」という言葉とともに、これまでのワークショップの経緯を紹介した後、いよいよ各グループの発表が始まった。片麻痺患者のための亜脱臼を防止する装具「シン・スリング」の説明では、工学部情報メディア学科の男子学生が「機能性だけでは満たされない、患者さんのニーズもある」と、装具という重苦しいイメージから解き放たれたファッション性の高さをアピール。脳卒中の後遺症などに苦しむ女性麻痺患者向けのネックレス装着アシスト「ウルトラC」では、同じく情報メディア学科の女子学生が装着方法を実演。誰かのサポートを受けるのではなく、自分自身でおしゃれを楽しむことで、人生に豊かさと彩りをもたらしてほしいという想いを語った。その他にも半身が不自由な人でも洋服を取り出しやすいチェストや、紐を結んだりせずとも、1枚の布で足を包み込んで履ける靴などが動画や試作品を交えながら紹介された。発表会を聞いていた参加者の一人が、「ニーズに応えるテーマ設定とアイデアをカタチにすることができるモノづくりは素晴らしい」と感想を語り、会場内から、それぞれのグループに対して拍手が贈られた。肩書きや、世代も異なるメンバーの中で、自分らしさを発揮した学生たち。グループで取り組む課題に「個」の力が交わることによって新たな価値が生まれる瞬間を体感した彼らの「未来社会へのモノづくり」へ、期待を抱かずにはいられない。



「ヒューマン・ホールド・チェスト」（片麻痺患者対応衣装ケース）



▲アーチ状に引き出せることで重心移動を必要とせず、建側で容易に出し入れすることが可能。

▲プロモーションのCG映像や試作品を実演するなど、成果発表にもアイデアが盛り込まれていた。

『Hallowワークショップ』HPはこちら
http://sangaku.nbu.ac.jp/hallow/

NEWS

モノづくりの新しいスタイルに地元メディアも注目!

産官学民の「アイデア」企業と学生が発表会

地場企業や学生が連携して介護現場の現場で役立つものづくりに取り組むワークショップの成果発表会が11日、大分県内の大学や日本文理大学、県立芸術文化短期大学の学生、地場製造業で、つくる側、使う側を含む、医療関係者、大分県庁、県立芸術文化短期大学、大分県医師会、大分県内の企業から約50人が参加。市内の会場でグループに分かれ、共通した福祉器具のアイデアを出し合った。

グループごとに発表し、アイデアは、半身が不自由な人が衣類を取り出しやすいようにチェストを使ったものなどさまざまだった。

「介護現場の現場で役立つものづくり」に取り組んでいる企業や学生が集まり、ワークショップを通じて、共通した福祉器具のアイデアを出し合った。

グループごとに発表し、アイデアは、半身が不自由な人が衣類を取り出しやすいようにチェストを使ったものなどさまざまだった。

発表したアイデアには、加齢や身体の変化を補いたいものもあるという。

こうした優しい形の人工筋肉を使ったものなどもあった。

参加者は、「ニーズに応えるテーマ設定とアイデアをカタチにすることができるモノづくりは素晴らしい」と感想を語り、会場内から、それぞれのグループに対して拍手が贈られた。

肩書きや、世代も異なるメンバーの中で、自分らしさを発揮した学生たちの「未来社会へのモノづくり」へ、期待を抱かずにはいられない。

2016.9.21 大分合同新聞（朝刊）

※掲載記事は許諾を受けています。

「生きがいのあるくらしを創るオープンイノベーションワークショップ」成果発表は地元メディアにも取り上げられた。学生と幅広い分野の専門家がアイデアを出し合うという手法について、関係者は「県内の新たなモノづくりの基盤に育てることを見据えている」とコメント。

学生たちの活躍は、NBUのCOC特設サイトをチェック！ nbu coc 検索

Copyright Nippon Bunri University, All rights reserved.

日本文理大学COC事業

キラリびと

『おおいた、つくりびと』で活躍する学生、教職員、地域の皆さんにインタビュー。

11

工学部
情報メディア学科4年

牧 佑樹

Q.「生きがいのあるくらしを創るオープニングイノベーションワークショップ」への参加のきっかけは?

A. 大学生活も終わりに近づき、自分はいろんな人に助けられてここまで来たことを実感する機会が増えました。だからこそ、自分も人のためになるもの、人の日常生活を支えるモノをつくることができないだろうかと考えるようになりました。そんな時に体が不自由な方の生活を手助けする器具を開発するプロジェクトがあると知り、自分も微力ながら障害者の方のストレスを感じる要因を少しでも軽減することができればと思い、このプロジェクトに参加しました。

Q. 今回の活動を振り返って。

A. 今回の活動でいちばん驚いたのは、社会人の方の柔軟性です。知識だけでなく、自分の専門性を活かすスキルが豊富だなと思いました。最初は、大人の皆さんにどのように接したら良いのかわからず不安だったのですが、学生でも意見を言いやすい雰囲気をつくっていただいたので助かりました。また、今回の活動を通じて様々な発見をすることができました。創造した器具の長所や利点だけでなく、マイナス面や課題点もたくさん見つかりましたが、どちらもつくらなければ分からなかったことなので、本当に貴重な経験になったと思います。これで終わるのではなく、社会人になっても、今回学んだことを何らかのカタチで活かしていきたいと思います。

and more...

PICK UP! COCプロジェクト

2016.08.01 **街のPRについて～チング[※1]ワークの成果**

韓国料理教室in豊後大野

“本当にマシッソヨ[※2]”と笑い声が飛び交う。初顔合わせに覚えたばかりの韓国語、そして初めての韓国料理づくり。でも、皆ずっと笑っている。箸が転んでもおかしい年頃の女子高生が仲間に入ったことで、空気が踊っている。高校生、大学生、留学生、地域の方々、総勢50名が公民館の調理室に集まり、トッポギ、チヂミ、チャプチェ等のレシピをもとに、食文化や韓流ドラマの話題に花が咲く。料理の美味しさに、皆の気持ちが近づく。

そのあと、「豊後大野市のPRについて」のチングワークが行われた。留学生の意見に前のめりになって耳を傾ける学生たち。チームごとの発表は、大学生の役割。慣れたプレゼンテーションに拍手喝采。大学生が照れる。「先生、今度一緒に、大学で授業受けさせてくれませんか～?」と参加した女子高生から声が上がった。少しでも自分の価値を高める努力を惜しまず、地域に貢献したいと願う大人の姿に、若者が魅かれる。そして大人は、若者から希望をもらう。

※1「チング」…友達　※2「マシッソヨ」…おいしい

まだまだあります！
大分県内をステージに進行中のプロジェクトが盛りだくさん。

- 若者が感じる祭りの醍醐味
- 初夏のエネルギーで育つ“感じる心”
- 現代版 あぜつくり

etc...

くわしくはNBUのCOC特設サイト **coc-nbu.jp** へ

coc-nbu.jp

文部科学省 地(知)の拠点
NBU日本文理大学

〒870-0397 大分県大分市一木1727
TEL.097-592-1600(代表)
http://www.nbu.ac.jp

大学院 工学研究科	□環境情報学専攻　□航空電子機械工学専攻
工学部	□航空宇宙工学科　□機械電気工学科　□情報メディア学科　□建築学科
経営経済学部	□経営経済学科

Copyright Nippon Bunri University, All rights reserved.